

第4回 高知県史編さん委員会

日時：令和7年9月5日（金）

10時30分～12時00分

場所：高知県庁本庁舎2階 第2応接室

出席委員：濱田委員長、藤井副委員長（監修者）、古谷委員、宅間委員、竹崎委員、
福井委員、上村委員、井上委員、渡部委員、羽賀委員、大門委員、鋤柄委員、
常光委員、岡本委員、原委員

※代理出席：竹内委員、小笠原委員

事務局：池上部長、小椋副部長、山崎課長、濱田企画監、土居課長補佐、目良チーフ、
松本主幹、紀ノ國主幹、小林主査、村越主事、大石主事、坂本専門員

配布資料：委員名簿

配席図

【資料1】高知県史編さん事業概要

【資料1-2】高知県史の第一期の総括及び第二期の計画について

【資料2-1】高知県史の掲載内容に関する主なご要望

【資料2-2】執筆委員及び特別調査委員の委嘱方法について

【資料2-2別紙1】高知県史編さん基本方針 新旧表

【資料2-2別紙2】高知県史編さん編集委員会設置要綱

【資料3】各専門部会の活動報告

【参考資料1】高知県史編さん基本方針

【参考資料2】高知県史編さん委員会設置要綱

【参考資料3】高知県史の編さん計画

【参考資料4】第3回高知県史編さん委員会 議事概要

【参考資料5-1】『高知県史』編さん事業 令和7年度計画表

【参考資料5-2】『高知県史』編さん事業 令和6年度計画表及び実績表

【参考資料5-3】広報啓発・人材育成の実施状況について

1 開会

今年度より新たに着任された委員の方々の紹介

2 委員長（高知県知事）挨拶

濱田委員長より開会挨拶

- ・この事業は令和3年にスタートし、早くも5年目を迎える。第一期を5年間ということで設定しており、振り返ると早い5年間であったと感じる。
- ・専門部会が7つ立ち上がり、大変精力的に作業を進めていただいている。
- ・初刊の刊行に向けた作業も着々と進んでいるという報告を受けている。皆様の協力に感謝申し上げます。
- ・これまでの第一期の取り組み状況の報告と、今後の第二期、令和8年度からの5年間の取り組みの計画について報告を受けて、議論いただくというものである。

- ・最終的には、書物としての『県史』の発刊に向けての取り組みを見据えて進めていくことになるが、1つ1つの刊行計画を考えると、スケジュールとしては大変タイトであると思う。委員の皆様方の今まで以上の引き続きのご協力をお願いしたい。
- ・かねてから、これまでの編さん委員会の場で、20年間の展望しての大事業ということ、成果にあたる部分をできるだけ早い時点で県民にわかりやすく提示し、ご理解、ご意見、ご所望をいただきながら進めていくことが必要ではないかと述べてきた。
- ・昨年度、これまでの調査結果等をわかりやすくまとめた「ときのあかし」を発行した。今後も県史の調査結果をできるだけわかりやすい形で、県民の皆様が関心が高まっている分野をタイムリーに、わかりやすい形での冊子ができれば、県史の事業に対する県民の期待、認知度もますます高まってくるのではないかと思う。そうしたことを考えてもらいながら、この事業を着実に進めていきたい。委員の皆様方の引き続きのご協力をお願いしたい。
- ・本日は限られた時間であるが、忌憚のないご意見をお聞かせいただき、さらに充実した編さん事業をやっていけるように、よろしくをお願いしたい。

3 副委員長（高知県史監修者）挨拶

藤井副委員長より挨拶

- ・知事から県史編さんの現状、状況をお話いただいたが、県史編さん事業そのものは概ね順調に進行している。
- ・今年度は文化財部会が立ち上がり、残すは自然部会の1部会のみとなり、来年度には全部会が揃い、全体の格好が出来た形で動き出す。
- ・来年度末には、県史の第一冊目にあたる『高知県史 資料編 近世1』の刊行をひかえている。その準備の様子も部会から報告があると思うが、概ね順調に進んでいる。全く課題がないというわけではないが、課題を解決しながら刊行に向けて進めていきたい。
- ・県史が何をやっているのかということ、県民の方にもわかってもらうために「ときのあかし」を刊行することになり、これを毎年行っていく。また、広報誌「ときぶし」にもページをいただき、報告をしている。少しずつでも、県史の活動が県民の方への理解につながればと思っている。
- ・次に続く、近代部会以下、それぞれ精力的な調査を進めており、刊行に向けての準備も進めている。
- ・編集委員の方々以外の委員の皆様からも、ご意見、ご要望を出していただき、より豊かな県史を作り上げたい。

4 報告事項

下記の事項について、事務局より一括説明。

- (1) 高知県史の第一期の総括及び第二期の計画等について
- (2) 高知県史の掲載内容に関する要望等について

■（１）高知県史の第一期の総括及び第二期の計画等について

- ・令和 7 年度に文化財部会が立ち上げ、取り組みを進めている。
- ・「高知県史の第一期の総括及び第二期の計画」について、以下のとおり報告。

〈体制整備・基礎情報整理〉

- ・編さん基本方針の策定、部会の立ち上げ等、体制整備を実施するとともに、県内の 34 市町村を訪問し、資料の所在調査を完了させた。必要に応じて引き続き調査等を行う。
- ・第二期の取り組みとして、来年度自然部会を設置するとともに、各部会が初刊発刊に向けて取り組みを進める予定である。

〈各専門部会の実績等〉

歴史資料は、総量を予め確定させることが難しく、実績の数値化が困難な部分があるため、各専門部会の初刊発刊に向けた計画と令和 6 年度末時点の実績をもとに、「到達度」として整理。

①近世部会

- ・来年度の刊行に向けて、土佐藩等の資料のうち掲載する資料の選定・翻刻を経て、年度内には原稿の執筆を終え、来年度、発注と校正を行う。
- ・今後の課題としては、初刊発刊に向けたレイアウトの検討である。監修者をはじめとした部会委員や先行している自治体、業者に聞き取りを行い、その決定を踏まえ、仕様を決定する。
- ・調査結果の活用としては、令和 5 年度に、芸西村の旧久重村における調査の結果を芸西村に提供するとともに、連携して報告会を開催し、地域住民の方々等に成果をお知らせした。

②近代部会

- ・令和 9 年度の刊行に向けて、旧役場の資料等の調査や掲載する資料の選定、翻刻を実施。
- ・課題としては、翻刻があげられる。今年度、専門の業者に委託等を行い、事務局と部会が一丸となり、翻刻を加速化し、概ね計画通り進めていこうと取り組んでいる。
- ・調査結果の活用としては、安芸市や仁淀川町の役場に調査結果を共有し、令和 6 年度には、安芸市における調査の結果を安芸市に提供するとともに、報告会を実施し、地域住民の方々等に成果をお知らせした。

③民俗部会

- ・令和 9 年度の資料編の刊行に向けて、調査を行い、選定した資料の解説等について、今年度から執筆に向けた準備が概ね進んでいる。
- ・課題としては、資料編は執筆部分が多く、民話、民謡等、分野が多岐にわたるため、関係者との調整が必要な点である。令和 9 年度に発刊できるよう、調整を図っていく。
- ・調査結果の活用としては、令和 4 年度には調査報告会を開催し、地域住民の方々等に成果をお知らせするとともに、令和 4 年度から令和 6 年度に中土佐町と連携して、民具調査の実施を行った。

④古代・中世部会

- ・令和 10 年度の刊行に向けて、調査を行うとともに、旧県史の掲載資料と東京大学の史

料編纂所に収集、所蔵されている原本との校正等の取り組みを進めている。課題としては、引き続きこの作業を着実に進めていくこととしている。

- ・調査結果の活用事例としては、「ときのあかし」に、写本からは確認できなかった長宗我部元親の最晩年の花押が明らかになったことを掲載する等、調査結果を活用している。

⑤現代部会

- ・令和10年度の刊行に向けて、県内外で調査を行うとともに、初刊の構成案を決定し、ページ数の設定等の取り組みが進んでいる。
- ・課題としては、執筆に向けて撮影のデータ整理を行い、円滑な執筆に向けた環境を整備していく。
- ・調査結果の活用事例としては、令和5年度に、芸西村の旧久重地区の同郷会の活動に関する調査結果についての報告会を、近世部会と共に実施した。

⑥考古部会

- ・昨年度設置した部会のため、到達度は示していない。
- ・令和11年度の刊行に向けて、遺跡等の文化財が埋蔵されている場所、包蔵地のリストを作成等を行っている。
- ・調査結果の活用事例としては、昨年度実施した四万十市タキモト城跡の調査報告会を四万十市で12月に実施予定。
- ・令和11年度の刊行に向けて、目次の策定や、刊行に向けた調査を継続していく。

⑦文化財部会

- ・昨年度設置した部会のため、到達度は示していない。
- ・現在、文化財に関する基礎データを収集しており、令和10年度の刊行に向けた編集方針等を、今年度中に作成する予定。

〈事務局の活動報告〉

- ・広報について、文化広報誌「とさぶし」に県史の活動を4ページにわたって、令和4年度から連載を行っており、アンケート結果からも好評をいただいている。また、調査結果を各委員に執筆いただいた「ときのあかし」や、「門脇家文書」等は地元紙にも取り上げられている。今後も多くの県民の方に調査結果を提示していく。
- ・人材育成について、毎年、大学生等を対象に、資料の撮影や解読の講座を実施している。講座修了生のうち、希望者は、「歴史資料調査隊」として、当室のアルバイトとして、撮影や史料の解読等に取り組んでおり、大きな貢献をいただいている。また、県内高校生への見学会を実施し、今年度も9名来ていただいた。参加した高校生からは好評をいただいております。今後も継続した人材の確保に取り組んでいく。
- ・デジタル化について、県史編さんに関するデータ収集は、画像で行っており、その結果をクラウドサービスを活用し、共有・編集を可能にするという体制を整備している。執筆に向けて、レーザー測量や無形民俗文化財の記録等を行っており、後世に残せるように、今後もデジタル技術を活用していく。
- ・市町村や施設等との連携については、調査成果の共有や報告会等である。今後は、自治

体史の編さんに取り組んでいる四万十市、香美市、大月町等の自治体に対しても、調査結果の共有等を行い、各自治体の取り組みの支援にも繋がるよう努める。

■ (2) 高知県史の掲載内容に関する要望等について

- ・前回の編さん委員会から新たに追加された事項は、「文化史や宗教史の掲載」である。文化史の中でも、文学者及び四国遍路等の県内の各種宗教の広まりについて、取り上げてほしいという要望があった。各専門部会において、文学や宗教に関する資料の掲載について検討しているが、今回の要望を踏まえ今後も検討していく。
- ・以前ご要望いただいた「南海トラフ地震」「仁淀川水系の水害」については、民俗部会及び近代部会からの報告させていただく。
- ・執筆委員及び特別調査委員の委嘱方法については、現在、編さん委員会の承認が必要となっている。各専門部会の刊行が本格化し、執筆に協力いただく方が増えることが想定されるため、この根拠規定を設置要綱に移し、手続きの簡略化を行う。この報告をもって、基本方針を改訂する。

【質疑応答】

なし

(3) 各専門部会の調査活動について

資料3について、事務局（古代・中世、現代、文化財）及び各専門部会長（近世、近代、民俗、考古）より、各部会による活動報告と主な調査について報告。

■事務局よりとりまとめて報告

(古代・中世部会)

- ・資料編の具体的な構成・配置を検討し、併せて凡例の確定にむけた具体的調整を進めている。
- ・史料調査については、資料編収載予定の主要史料群を対象に、県内外を問わず広く実践してきた。特に、石谷家文書は、長宗我部氏を中心とした土佐のおかれた状況を明確にするため、調査を行っている。当該資料は、織田政権と長宗我部氏の関係性を示す重要史料で、社会的注目度が大きいことから、その全点につき詳細な確認・分析を行い、資料編、本編に掲載する予定である。

(現代部会)

- ・現代部会では、県や市町村の行政資料の調査をはじめ、県内外の団体や県人会等に対し、資料や聞き取りの調査を進めている。資料編は、各巻で県内の3つの地域の資料を掲載する等、特色のある構成を目指している。
- ・調査は、県全体の経済や政治について進めるとともに、各地域に入り込んで進めてもいる。四万十市西土佐の調査は、その一例であり、旧満州からの引揚者の方への聞き取りを通じて、引揚げだけでなく、戦後の西土佐でのくらしの姿を調査している。
- ・特に、戦後の山村振興施策がくらしに与えた影響や、地域のつながりの継承、道の駅「よって西土佐」の地域づくり等を、西土佐の人々が戦後歩んできた道のりを資料や聞き取

りで明らかにしていく。

(文化財部会)

- ・取り上げる文化財は、国及び県指定の文化財を対象としているが、市町村指定、その他の文化財についても調査を実施し、取り上げる。
- ・令和10年度に刊行される資料編では、「無形民俗文化財」や県内の「天然記念物」を取り上げる予定である。

■各専門部会長より報告

(近世部会)

- ・調査は、「三谷家文書」「北川家文書」等の家文書を対象に実施。近世文書は一つの家でも数千点とあり、委員のみでは調査が進まないため、年に2回ほど、県内外の院生や大学生を含め、20~30人のチームを組んで調査を行っている。
- ・大学生の交流により、地元の大学で大学院進学を考える方がでてきたり、高校生の見学を受け入れ、人材育成にも貢献している。
- ・資料編の第一巻目が来年度に発刊予定となっており、それに向けて詰めの作業が始まっている。掲載資料は、幕末に編さんされた土佐藩の初期から約150年程度の歴史に関する資料集『藩志内篇』の全ての翻刻を行う。これは、これまで公開されていない初めての事例である。その他、武家文書をめぐり、領地や法令等、土佐藩の枠組みに関する資料を収載する予定である。
- ・調査報告の1つめは、土佐藩の人口に関するものである。これまでは、土佐藩の人口の合計数の研究はあったが、つぶさに資料を集めると、身分別、地域別、男女別、年齢別の人口が調査されており、当時の人口分析に大変役に立つ資料が発見された。おそらく例年行われているようで、これからも集めていくことで、江戸時代の人口編成が具体的にわかっていくのではないかと考えている。資料から、前年度と比較して7千人ほど人口が増加しており、近世中期の人口の激増状態がわかる。
- ・調査の報告2つめは、人の動きについての資料である。土佐藩の産業を支えた材木については、材木を切り出すための山を、江戸時代初期は上方の商人に伐採権を売り、土佐藩の収入にするとするものであった。中期になると阿波の商人が出てきて、後期にやっと土佐の商人が請け負うが、労働力は阿波から流入してくることがこの文書からわかる。国境を跨いだ武士の動きというものはこれまでの研究にもあったが、労働力の流入というものはあまり触れられたことがなかったため、新しい研究の分野になる。
- ・今までのデータの更に詳細なものが見つかるということや、今まで考えられなかった歴史像の根本となる資料が発見されるということもある。悉皆調査をすることによって、このような成果ができていく。

(近代部会)

- ・近代の初刊である資料編2は、1889年から1919年を対象とし、日本全体の歴史の流れ及び高知県知事の在任期間を考慮して設定した。10章の構成のうち、特に30年間、

戦争や、伝染病の流行、災害が頻発していたことを考慮し、「戦争と社会」「疾病・災害と地域管理」を章立てした。特論は5項目を立てて、資料を収集している。

- ・編集については、今後1年を目途に、掲載する資料の選定作業を進めている。
- ・県内各地で、各委員や合同で調査、撮影を進め、翻刻し、資料選定が行える体制を充実させているところである。
- ・調査事例については、第3章で取り上げる「災害」について、県内の近代災害遺跡の調査を進めてきた。1890年以降、6度ほど大水害に見舞われており、災害の実態及び救済、復旧の歴史が問題になるが、これまで十分に解明されていない。文献資料から明らかにできるが、他方で災害史の重要な資料として石造物が挙げられる。
- ・香美市の春野神社の境内に建てられた「重修山田堰之碑」は、野中兼山の山田堰の工事を顕彰する目的で建てられた。この他、野中兼山の治水事業を振り返る建造物は、いの町の鎌田堰跡等いくつか存在している。その多くが、明治中期から大正、戦前期に建立されたものであるため、このあたりの調査を進めながら、野中兼山の再評価がこの時期に始まっているということを目にしたい。
- ・土佐山田町の「雨喜峯疎水碑」の建立に関与した人物についても注目したい。この疎水工事に意義を記した白石直治と同時期に県内から廣井勇という土木技術者が活躍している。
- ・なぜ、白石や廣井のような土木技術者が同時期に高知県に生まれたのかということや、1890年代以降に兼山の再評価が出てくるといふ問題を関連させながら考えていくことを近代部会の課題としたい。

(民俗部会)

- ・前回の編さん委員会以降、東洋町をはじめ計10回の現地調査を実施し、今年度は四万十市及び宿毛市にて合同調査を予定している。
- ・資料編1を令和9年度の刊行予定としている。民話、民謡、地名の3部構成であり、現在、概ね各章が固まってきており、一部原稿執筆に着手している。民話については、文学館が所蔵している市原麟一郎氏が採録した録音テープのデジタル化を進めている。デジタル化の作業が終了した後に、録音を聞き、県史の編さんに活かせるものを活かしたい。
- ・調査事例は、多岐にわたるが、地震、山津波に関する民俗調査を紹介する。
- ・高知県の伝承の顕著な例として、地震が発生したときに「カアカア」と大きな声を上げる。日本各地では、それぞれ地震が発生したときに文言を発する。高知県においては、昭和南海地震の際も、「カアカア」と叫ぶ人がいたことが県内各地から報告されており、安政南海地震の際も記録している人が少なくないことがわかった。「カアカア」が意味するものとして、通説では「川を見よ」とのことであるとされているが、実際には揺れを鎮めるためにとっさに口をついて出てくる呪文のような意味合いが強いということも伺える。また、カラスの鳴きまねであるとする説も見られるため、今後調べていく必要がある。

- ・天明8年の蕪生の山津波は、「蕪生の山つえ」と称され、伝説として長く語り継がれてきた。伝説では、山崩れの原因を、毒流しによって谷川の魚類を根絶やしにしたことが淵のヌシの怒りに触れたためであると語られているが、かつて文字に縁のなかった人々は、自然災害を伝えていく際に、ゆかりの事物とともに、伝説として代々口承されてきたと考えられる。
- ・高知県下には、津波、山崩れ、洪水等の自然災害にまつわる民話が各地に伝承されているため、その背景についても多方面から調査を進める必要がある。

(考古部会)

- ・考古部会の特質としては、旧石器時代から戦争遺跡までという長い期間を対象としているが、現在、メインは旧石器時代から古墳時代を対象として、調査及び編集を進めている。
- ・編集について、旧石器から縄文時代は順調に進んでおり、来年度に弥生時代、古墳時代を進めていくことで、資料編刊行を目指している。
- ・成果公開はタキモト城跡の調査について報告を行い、次号の「ときのあかし」については、県民の方々がよくご存じの龍河洞と朝倉古墳をテーマに考えている。
- ・「若宮ノ東遺跡」出土の刻書土器の調査方針について報告する。
- ・令和7年1月刊行の『若宮ノ東遺跡Ⅲ』の報告書内で、国立歴史民俗博物館名誉教授平川南氏の刻書へのコメントが掲載され、県内外に広がるニュースとなった。
- ・考古部会としては、土器につながる歴史をどう記述するか専門の委員と検討を進めている。現時点で、土器の年代をおよそ3世紀ごろとしており、今後は自然科学的調査を含め、詳細に検討をしたい。
- ・3世紀頃から畿内では古墳が造られ始め、高知県でも弥生時代から古墳時代へ社会が変化する時期とされ、県外からの土器が多くみられ、人々の交流があったことがわかってきた。ただし5世紀までは高知県の古墳の発見は極めて少なく、古墳時代前半の高知県は、畿内とは異なる独自の社会と文化を持っていたという状況をふまえ、この土器が高知県に訪れたことを大きな特徴年、何か新しい情報が高知に受け入れられたことを示す非常に重要な資料であると考え、部会の中で検討をしている。周辺の遺跡や一緒に発見されている様々な資料の調査を総合的に進めながら、古墳時代前期の高知がどういったものなのかということをも明らかにしたい。
- ・畿内以外の地域との関係が考えられることから、日本列島及び東アジアまで視野を広げ、畿内とは異なっていた高知県独自の社会と文化の源流を突き止めたい。そして、それを県内の皆様にお伝えすることで、高知の魅力発信に繋がるものではないかと考えている。

【質疑応答】

■福井委員

- ・土佐山の山嶽社は、板垣退助の秘書をしていた和田三郎の生誕地である。土佐山学舎の児

童、生徒たちは、土佐山のことが大好きで、歴史に誇りを持っている。そういった歴史は各地が持っており、誇りになると思う。そういった機会があれば、和田三郎や、児童、生徒が暮らしている地域、土佐山の山嶽社等についても紐解いてもらえると嬉しい。

→（近代部会 羽賀委員）

- ・和田三郎や山嶽社の活動について、当然、「資料編1」「資料編2」で取り上げ、「通史編」では、必ず取り上げなくてはならないと考えている。自由党史の編集の研究が進んでおり、その中で、和田三郎も関与しているため、そのあたりの情報をお知らせしたい。
- ・県内の民権結社については、高知城歴史博物館で展示があり、その展示を企画した学芸員の方は相当情報を持っていると思う。山嶽社についても情報を集めながら考えていきたい。
- ・地元の地域の歴史教育について、熱心に行っていると伺った。その状況についても、機会があれば、見学を含め、近代部会としても協力させていただく部分や、情報を得られる部分については、お話する機会があればと思う。

■古谷委員

- ・高知県の人口が大正中期ぐらいになっており、我々の世代だけでなく、若い人たちも高知県の状況を憂いている状況にある。これをどうすればよいか、ということを経験から考えているうえで、時代、世代で、人口の推移を示していただくと、高知県がどのようなところにあるのかということが、若者にもわかるのではないかと思う。
- ・高知県の若い世代の方は、大学進学を機に、都市圏へ移ってしまい、高知県に帰ってくるかと思いきや進学先や都市圏で定着してしまい、高齢化の一步を進んでいる状況にある。
- ・そうした中で、中山間地域では人口減少に伴い、消失してしまうのではないかという地域も垣間見られる。語り継いでいく高齢者さえも、歴史を受け継いでいく次の世代が全くなければ、高知県がどこにあったのだろうということに将来なってしまうのではないかという危惧がある。
- ・調査には、大学生が参加しているということだが、中学生まで参加させていくと、これから県史を編さんしていくうえではよいのではないかと思う。そういったことも視野に入れて、高知県に愛着を持てるような、若い世代の育成に努めていただけたらと思う。

→（近代部会 羽賀委員）

- ・近代部会として、特に「資料編2」について、構成の中に「人口と移動」という節を設けて、人口の推移、国内への移住や海外の移民について章を立てて調査を行っている。
- ・正確な人口データは、国勢調査（大正期）以前はない。一方、戸籍簿や誰がどこに出稼ぎにいつているかという記録は各所に残っていることを確認している。この章については、専門の研究者が行っているため、それなりの成果は出ると思う。
- ・人口が急速に減少していく中で、高知県史を編さんするということがどういう意味があるのかということは、常に考えながら行っているつもりである。高知県史の編集と現在の人口、地域問題についての関連については、常に意識して行っていきたいと考えている。

→（現代部会 大門委員）

- ・現代部会では、西土佐の例を資料で紹介した。現代部会の資料編では、各県全体のテーマと同時に、県内を三分割して資料を掲載する。戦後すぐから今に至るまでの長い時間をとって、地域で資料を掲載できるようにした例が西土佐である。
- ・土佐山でも調査を行った。教育の問題と地域づくりの問題の2つの連環を各時代ごとに明らかにしていくことがとても大事な課題であると思っている。人口減少の問題についても、現代の土佐山や西土佐の例から歴史的な教訓を学ぶことができたらと思っている。

■竹崎委員

- ・広報等を十分にさせていただいているが、現場の生徒や教員からするとまだ認知度が高まっている状態ではないと感じている。
- ・人材育成という観点では、高校生や中学生等の若い世代が、郷土や歴史にしっかりと関心を持ち、積極的に学んでいこうという姿勢を育てていく必要があると思う。そういったことに、郷土史の編さんを活用して、学びたいという意欲を育てていくことが大事である。
- ・その中で、ぜひ高校生、大学生だけではなく、20代、30代の歴史を担当する若い職員たちへの研修や見学の機会を設定していただきたい。
- ・生徒たちに興味関心を持たせる上では、現場にいる教員が、研修やその他活動を通じて、郷土史の魅力や高知県の魅力を伝えていくことが、すそ野を拡大につながるのではないかと思うため、そういった活動も今後検討していただければ。

→ (事務局)

- ・県内の大学生、高校生に対しては、啓発の取り組みを行い、大学生の方は資料の撮影や翻刻に多大な貢献をしている。
- ・現在、高校生の見学の受け入れは、追手前高校のみの実績となっている。7月の見学は大変好評であったため、秋や冬にも実施ができればと考えている。
- ・ご提案のあった教員の方々に対するご紹介や、見学会については、どのようなチャンネルがあるのか、どのような機会で行うのかということをご教示いただき、ぜひ実現できればと思う。

■宅間委員 (土佐史談会 会長)

- ・古代・中世部会の石谷家文書、考古部会の刻書土器等の報告に対する感想。
- ・県史に対して、県議会議員からの要望が多いが、一般の方からの要望も多いと思う。以前とは異なり、(土佐史談会が行う)研修会にも男性の参加が非常に多くなってきており、新しい見方や考え方がでてきている。野中兼山の再評価等、そういった部分を取り上げていくのもよいと思う。
- ・広報について、「とさのあかし」のような年1回のもを出すよりも、頻繁に出していくことが大事ではないか。「とさぶし」も行っているが、「さん SUN 高知」のように薄いものに各部門の先生方が書いたものを毎月出すことが、宣伝にもなり、歴史に興味を持ってもらう契機にもなると思う。

→ (事務局)

- ・広報について、現在、年4回「とさぶし」で広報をさせていただいている。また、考古部会では、鋤柄委員のブログをホームページを通じて発信している事例もある。
- ・より多くの県民の方に触れられるためにどういうふうにするのかという点は事務局で検討していく。

■上村委員

- ・地域振興を行っている中で、北川村ではどれくらいの人口規模が適正であるのかということも議論している。実際に農業で食べていくことを考えると、人口が多すぎても生きていけない。
- ・それぞれの時代の経済を考えたときに、高知県ではどれくらいの人口規模が適正であったのかという点に興味を湧いた。そういった見方ができるのであれば教えていただきたい。

→（渡部委員）

- ・質問の答えにはなっていないと思うが、近世の場合には、詳細なデータを並べると、土地、生産、工業、産業等の問題が人口の動きとどう関連するかということは、もう少しデータが集まると見えてきそうである。
- ・時代によって、男女の数に開きがあることについても、原因を明らかにすることによって、人口がどう構成され、変容するのかということが、近世と今を直結するわけにもいかないが、およそ見えるようになりたいと考えている。

4 副委員長（高知県史監修者）総括

藤井副委員長よりコメント

- ・様々なご意見くださり、感謝。
- ・皆様の関心が今の問題をはじめとして、様々な歴史的な展開を明らかにするということが、編集委員にとっても一つの課題であると感じた。
- ・実際に、各専門部会の調査で新しいことが明らかになっているということは、一つの成果であると思うが、今日いただいた課題にも積極的に応えられるような方向で取り組んでいきたい。実際にするのは難しいこともあるが、そういったことも念頭において編さんを考えていきたい。
- ・広報の問題についても、もう少し検討をしたいが、始まったばかりであることもあり、今の方向で行い、不足の部分を補ってみてはどうかと私自身は思っている。
- ・複数の委員から課題を出していただいた人材育成の取り組みについては、高知県が危機的状況にあるとして、基本方針の中に組み込んだ。いかに人を育てるかということは、県史編さんで全てができるということはありませんが、県史が助けになればと思う。
- ・中学校、高校の先生は忙しく、具体的に何かに参加いただくということは難しいであろうが、お声がけいただいたため、何らかの形で参加してもらおう状況が生まれればと思う。

5 委員長（高知県知事）総括

濱田委員長よりコメント

- ・熱心な審議に心より感謝。

- ・事業の進捗管理に関しては、いよいよ第二期に入っていく。刊行に向けて、進行管理を進めていくことが重要である。各自治体史の編さんとの連携を考慮して進めていただければと思う。
- ・近世の人口データ、近代の治水や土木技術の県内での展開、民俗分野では地震が起きた時の民衆の反応、考古では先般の若宮ノ東遺跡等、各部会の委員から具体的な研究の報告を受けて感銘を受けた。
- ・我々の身近なところで知的な好奇心を刺激され、関心高いテーマで研究いただいていることを嬉しく思い、高知の誇りを感じる。
- ・なんとかして、今、我々がもがきながら人口減少対策について取り組んでいるところで活かしていけないかという思いで拝聴していた。
- ・郷土への愛着を若い方に持っていただく。小中学校の頃からの展開をしていける素材はありがたいものが提供していただけるのではないかと。若いころから興味関心を持ってもらうことで、県外に出た若者も、何かの折に高知に帰ってきていただけるのではないかと。
- ・北川村では、小中学生が「北川学」と称して、地域の歴史を学ぶことで活動を展開している。そういったものとうまくタイアップしたり、活用できるのが理想ではないかと。
- ・高等学校の再編を具体的に検討しているところですが、少子化が進む中で、高等学校の魅力化、特色化を進めないといけないということと、片方でこの分野での人材育成というところが何とかリンクできないかと。
- ・県史編さん室の事業では、追手前高校生の見学を行ったという報告を受けたところ。これも、なかなか簡単ではないと思うが、本県では、特に中山間地域の学校の生徒が減っており、全国から生徒を集めて来られるような、特色のある学校づくりをしていかなければならない。熊本県の漫画学科や、愛媛県の水族館では、本当に全国から生徒が殺到するような良い学校づくりが進んでいる。現実には、県内の中山間の学校は今これをやらないといけない。「全部で」ということにはならないと思うが、「歴史」にかかわる学びをうまく結びつけて、何か新しいプランができないかという感想をもった。
- ・こうした文化的な資産を発信をしていくための拠点が県の文化施設。この施設の活性化ということで新しい取組をしたいと県でも模索している。こうした魅力のある施設では、例えば、観光面でたくさんの方に来ていただくときの吸引力の1つに文化がならないかということや、例えば企業とのタイアップの話等、もっと強力に皆さんに知っていただいて、好循環を促して、文化施設の活性化にもっていけないか。
- ・そうした論点も含め、20年間毎年1億円前後の予算をかけて行っている事業であるため、人口減少が進む高知県を元気にするためにも、なんとかこの事業が貢献していただけるようないい形で、庁内の連携もしていきたいと思っている。
- ・庁内のみならず市町村、民間事業者の皆さんとタイアップとして、この事業が意義のあるものになるように頑張りたい。

(以上)